

3.11原発爆発事故から4年

特集

福島の人びとの声を聞く

東日本大震災から4年がたった。福島の人びとは、どのような生き方を選んできたのだろうか？ 今年4月、震災以来APLAがつながってきた有機農業の生産者、バナナ募金を通して交流してきた幼稚園・保育園の関係者を訪ねた。それぞれの人生、環境下で、何が変わり、何が変わらなかったのか？ 希望をもって将来を語る人びとの声をお届けしたい。(インタビューのまとめは編集部)

地産地消の給食を取り戻したい

高松祥子 / たかまつ・しょうこ
福島県有機農業ネットワーク

震 災の時は大学生で、帰郷中に被災した。卒業後地元に戻り、3年前から福島県有機農業ネットワーク(通称「有機ネット」)の事務局長をしている。実家は農家ではないので、有機農業に携わることで、季節を感じ



じる野菜に出会い、農家の人たちと交流してきた。

今、痛感しているのは、放射能が検出されたかどうか以前に、県内消費者が福島県産を避けていること。有機ネットも地産地消を積極的に呼びかけず、福島を応援してくれる県

震災は自分の意識を大きく変えた

大内督 / おおうち・おさむ
二本松有機農業研究会

農 業を始めて17年。震災までは、元気な親父に言われるまま仕事をしていた。一定のお客さんもついてきたから、そんなにやる気も冒険心もなかった。でも震災後、見る見るうちに野菜を買ってくれるお客が減っていった。

これはやばいと感じ、何とか変えなければと焦った。本当に野菜を作れるのか？ 親父とは何度も反発しあった。親父は「絶対作る」と言い張った。放射能汚染された土地で芽は出るのか？ もし出ても本当に売れるのか？ 放射能が検出されなければ食べて大丈夫なのか？ 疑問だらけで、すべてが不安だった。でも昔からのお客さんに、「大内さんが作ってくれないと食べものがなくなる」と言われて、信じてくれる人がいるのに、自分が不安がっているのはだめだ、しっかりしないと、と自分を叱咤したが、不安をとり除くのに2年はかかったなあ。



その後、APLAと出会い、「福島百年未来塾(ページ年表参照)」を開催し、自分はフィリピン・ネグロス島へ、近藤恵君はドイツに出かけていき(同右)、たくさんの方たちと交流した。この4年で何が一番大きく変わったかという点、自分の意識。仲間たちと再生可能エネルギーの勉

強をして、バイオマスがこの地域には合っているという考えに行きついたけれど、冬は議論が盛り上がるが夏は忙しすぎて手がまわらない。でも再生可能エネルギーによる循環農業をこの地域に創ることが夢であり目標なので、それを実現するための仲間づくりの活動を続けている。今、最大の問題は地域の農業に元気がないこと。以前からの問題だったが、震災でそれが加速した。不耕作地が周りに広がっている。今は自分たちの畑で手一杯だが、バイオマスを活用して不耕作地を新しい農地につくり変えたい。一人では難しくても、一緒にやる仲間づくりをしていきたい。

出会い

赤松結希 / あかまつ・ゆき
(株)オルター・トレード・ジャパン 事業部商品一課



た またまつけたテレビのインタビューで、ある人が言っていた。「人は出会いによって日々変わる。一日として同じ日はない」と。なるほど。毎日絶え間なく成長し続けている、という自信はないけれども、確かに出会いの一つ一つに様々な刺激を受けて日々過ごしている。その経験の積み重ねで、今の自分が存在している。

特にテーマに興味があったわけではなくても、たまたま手に取った小説。たまたま読んだ新聞記事。何気ない誰かとの会話。共感することや、勇気づけられること、怒りを感じることも。

ネグロスという現場に行けば、一気にたくさんのお客さんがいる。でも残念ながら、バナナ担当と言っても、フィリピン全国に3000人以上もいるバラゴンバナナの生産者全員と、会うことはかなわない。けれども、他の方法での出会いもある。「ハリーナ」を通してなら、バナナ生産者以外、ひいては私自身が一度も訪れたことのない国の多くの人たちや、彼女らの物語との出会いがある。

含めると、この職場に通ってかれこれ20年。時には、同じようなメンバーで似たような議論を繰り返していると感じることもあるけれども、決して同じわけではない(としたい)。

先日、実家の片づけをした。何十年も知っていると思っていた家族の、知らなかった一面を発見したり、昔は「あたりまえ」と思っていた風景を今は懐かしく感じたりと発見がいっぱいで、これがなかなか面白くて、ちつとも進まない。日々私が変わり、周りも変わる。ワクワクして多くの出会いを求めるときもあれば、少し疲れてひっそりしていたい時期もある。そんな時期にも、そっと、そして確実に出会いを運んでくれる「ハリーナ」を、これからも楽しみにしている。

カネシゲファーム・ルーラルキャンパスのクラウド・ファンディング、達成おめでとう。日頃の支援者に加え、短期間に200人以上もの知っている方、知らない方に支えられたこのプロジェクト、みんなが進捗を見守っている。卒業生たちの試行錯誤の物語、待っています！

「ポコポコ」は「サンゴ礁の満潮」をイメージしています。潮が満ちていくにつれ、サンゴ礁のあちこちに「ポコ」(水たまり)が現れて、ポコポコ同士がつながり始め、いつの間にか一面海になるというイメージです。アジアの各地域で「ポコ」が生まれ、気がつけばつながっているような活動をしていきたいという思いがこめられています。

CONTENTS ■ HALINA 29 2015.08.01

- 02 Relay Essay ポコポコ 29 出会い◎赤松結希
- 03 [特集] 3.11原発爆発事故から4年 福島の人びとの声を聞く 大内 督、高松祥子、佐藤 喜、仲里 忍、近藤 恵、佐々木 り、渡邊 幸、門間 貞子、遠藤 美保子
- 09 [Topics] 『クロンビ、風が吹く』を見て——江村、そして辺野古◎冠村京子
- 10 [Column] Kakao Kita カカオ民衆交易奮闘記① 自然にやさしい人びとの暮らし◎津留 歴子 マニラ・ジブニー通勤⑤ また燃料補給で何か？◎小川 二美子 口口サエの歌が聴こえる⑤ BE'E◎野川 未央 美味しいマンガ⑤ 『ばらかもん』◎安藤 丈将
- 12 わたしの友産友消 じまん⑤ ネラの卵の巻◎中村 美紀
- 13 APLA食堂⑥ バランゴンバナナ◎大久保 ふみ、廣瀬 康代
- 14 [Voice from APLA partners] [フィリピンより] 皆さまの応援のおかげで目標達成しました!
- 15 事務局だより

表紙のことば

大学時代、学校のプログラムで訪問したバングラデシュ。ここでは、女性はサリーかサロワカという服を着るのが一般的で、この布はサロワカスタイルのときに使用する「オロナ」というショールです。サリーは長い1枚の布を体に巻き付けて着ますが、サロワカはワンピースとパンツとショールの3点を使用します。サリーと違い、ワンピースを一枚羽織るだけだと胸元のラインがわかってしまうので、それを隠すのがオロナです(イスラムでは、女性は身体の線がわからないようにして男性からの視線を避けるのが好ましいとされています)。主に学校の先生や既婚者、礼服として使用するのがサリーで、若い女性が着るのがサロワカだとか。

普通のパンツとは違い、丈が長いサロワカのパンツ。バングラデシュ訪問時は雨季真っ只中で、足元が濡れていつも指が冷えていました。室内にいる間はパンツの先を指先まで伸ばして履いていて、みんなに笑われていたのを覚えています。(赤石優衣)

APLAと福島のこれまでの歩み

- 2011年7月**
二本松有機農業研究会を訪問。
- 2011年11月**
福島の幼児施設にバラゴンバナナを継続的に送るために、「福島の子どもたちに届けよう バナナ募金」の取り組みを開始。2014年度末現在、23カ所の幼児施設に約10トンのバナナを届ける(募金総額410万円)。
- 2012年3月**
APLA SHOPで二本松有機農研の「有機人参使用まるごとジュース」をの取り扱い開始。【写真①】
- 2012年4月～2013年2月**
二本松有機農研と『福島百年未来塾』を全6回開催。除染、地域経済、内部被曝等について学びつつ、脱原発・自然との共生・農と食の再生について考える。その後、二本松有機農研の再生可能エネルギーに関する視察にAPLAも同行し、その実現に向けての活動への協力を継続している。
- 2013年1月、10月**
幼児向けバナナワークショップを幼児施設で開催。
- 2013年2月**
二本松有機農研の若手農民2人が、ネグロスのカネシゲファーム・ルーラルキャンパスを訪問。
- 2013年9月、14年10月**
バラゴンバナナ生産者が幼児施設を訪問して交流。【写真②】
- 2013年12月**
「APLA福島ツアー」を開催。二本松有機農研等と交流。
- 2014年2月**
APLAとBMW技術協会との共催で「ドイツのエネルギー転換と有機農業」スタディツアーを実施。二本松有機農研から4人が参加。【写真③】
- 2014年11月**
バナナ募金活動を実施した東洋大学の学生たちが、福島の幼児施設と二本松有機農研を訪問・視察。

※上記のほか、二本松有機農研およびバナナ送先幼児施設を随時訪問して、現状の聞き取り、情報交換、懇談・協議等を継続している。



【写真①】



【写真②】



【写真③】

外に発信し続けてきた。「外部被曝しているのになぜ内部被曝までしないといけないのか」という地元の消費者の声を聞く心が痛む。だから、外で応援してくれる人を頼った。でもそれでは未来が見えない。新鮮な野菜は近くの人に食べてもらいたい。昨年、有機ネットの呼びかけで「オーガニックフェスタ」を開催した大内督さんが実行委員長で、ようやく地域の地に地産地消を発信するイベントができるようになった。イベントには3000人近くが参加したが、その先がまだ動いていない。放射能とは何百年も付き合わなければならぬ。「もう大丈夫です！」と言えるまであと何年かかるのか。農家と消費者が互いを理解しあう

場、こんな作り方があるよ、こんなに美味しいと、頭より身体が動くよ。うな関係をつくりたい。そしてこれまでお互い避けてきた人たちどうつながれるのか。これは長い闘いだ。私の夢であり目標は、地産地消の子どもの給食を取り戻すこと。あと何年、何十年かかるかわからないけれど、そのためには母親たち含めて意見の一致が必要になる。今は、一人の母が反対すると全部だめ。一人で弁当を持っていったら学校で仲間外れにされる。放射能の問題は風化させず、しかし地元のものを食べることを言い続けることは本当に難しいけれど、小さな子どもを持つ若い世代の親たちが先頭に立つようなネットワークをつくっていききたい。■

不耕作地を里山の風景に

佐藤良喜 / さとう・よしき
二本松有機農業研究会

震 災前は県外で農業をしていたが、震災後、出身地の二本松に帰って就農して、二本松有機農業研究会に入った。最大の悩みは、農業は儲からないということ。ペテラ



ンの有機農家の中に入って勝負しないといけないので、みんなと同じものを作っても売れないから、他が作らない西洋野菜や変わり種を作ってきたが、それも売れなくて……。儲けて農業を続けられる道を探さない

と持続できない。販売先をもっと探さなければならぬので、一年間の野菜出荷スケジュールをイラストや写真入りで読みやすくしたチラシを作った。これはレストランなどで重宝がられている。また、地域の人が集まる場「あぶくま農と暮らし塾」にも関わっている。農学、伝統食、地域文化を継承する場で、今度は醤油作りを企画している。ここで農業を始めたきっかけは不

みんなのたまり場をめざして

仲里忍 / なかざと・しのぶ
のうか民宿ゆんた
(http://sansanfarm.com)

僕 は沖縄の石垣島出身。様々な職について里山を探していた。見つかっても、軽トラを持ってこいとかお金のかかる条件が多すぎて考えあぐねていた時に、ここ「ゆうき



耕作地を解消することだった。ただ作物を植えるだけでなく、周辺の環境づくりまで手がけたい。不耕作地では、畑に行く小道もすぐ荒れてしまっている。そうした小道をつなげて、例えば小川が流れている畑など、里山の風景を取り戻す。そんな夢もっている。まずは自分の土地から始めて、仲間を増やしていきたい。■

の里東和」を知った。東和は受け入れる体制がしっかりしている。軽トラなんかなくてもいいと言われ、逆に中古のトラックを買ってしまった。ここでの出会いがなければ生活できなかったなあ。きゅうり、なすを作り、毎日出荷できるようになった3年目に震災にあった。出荷制限で野菜生産が減らされた頃、内閣府の補助金でとれて、3年前に民家を改造して「のうか民宿」を始めることができた。民宿のお客さんから、「福島にいくのは不安だったけど、来て良かった」と聞くと、風評被害をなくすには良い場づくりかなど。町起こしと有機農業に関心をもつ女子大生は「オーガニックに関心あるのになぜ福島にいくのか」と親に言われたらしい。オー

ガニックは自分の身体を綺麗にするためだけのものではない。人間のエゴで汚した土地は使い捨てて大切にせず、自分だけ「いいとこどり」する考えはオーガニックでもなんでもない。

そんな話で盛り上がりながら、様々な考えや意見の交流ができる場所をもっとつくりたい。お客さんに隣家のおばさんのわらじ作りを体験

してもらって、近所の農家を案内すると、そこでまた話が盛り上がり、自分にとってもすぐ勉強になっている。地元の若い人のたまり場にもなっていて、「あぶくま農と暮らし塾」の交流会や勉強会にも使われている。自分は年寄りの技術を継承したくて、竹細工やわらじ作りを習っている。■

自分たちが作るエネルギーで不耕作地を再生したい

近藤恵 / こんどう・けい
二本松有機農業研究会

15 年前に専業農家になった僕だが、ひよんなことからAPLAと出会い、今では評議員もつとめている。



農業は儲からないという人もいるが、僕の場合は、野菜と直販の米で儲かり出した時に震災にあった。こんなに食べるのを欲している人がいるという手ごたえを感じた時だった。この4年間は、とても長くてもまだ整理ができていない。農業を始めた当初、二本松有機農業研究会の大内信一さん、千葉県成田の小泉英政さんに大きな影響を受けた。カリスマ的な農業者ではなく、普通の人ができる農業を自分自身で勉強してきたつもりだ。

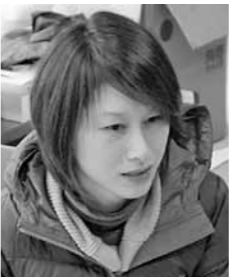
大内さんが「よらば大樹の陰」とよく言うのだけど、これは、しっかりと技術を持つ人は、しっかりと結果を得る、ということだを理解している。

自分はモノをつくるのが好きだから、これからはいろいろなモノを作

りたい。そのひとつが再生可能エネルギー。自分たちで全部やることばれてしまうので、補助金などさまざまな制度を利用して、一緒にやりたいという人のつながりのなかで実現

ハハレンジャーの活動は続く

佐々木るり／ささき・るり
真行寺、青空市場委員会ハハレンジャー



4 年たつて一番感じることは、放射線量は一向に下がっていないのに、人びとの放射能に対する意識がどんどん薄れていくということ。いつまでも気にし続けることに疲れ、忘れてくなる気持ちも理解できるが、県や行政の「風評払拭」「観光客呼び戻そう」キャンペーンの影響がかなり大きい。「福島はもう大丈夫」という宣伝が目立ってきて、放射能を気にしている人たちは

したい。自分たちで作ったエネルギーで不耕作地をどう有効利用させることができるか。そして地元の加工業にも、もっと若い世代を引き込みたい。■

「騒いで風評を煽って復興を妨げている邪魔者」のように見られてしまう。我が家は未だお弁当を自宅から持って行かせているが、学年で2人くらいになってしまった。子どもが後る指をさされるのではと心配になってきている。

地元で安全な野菜を作っている人たちが風評被害で苦しんでいるが、行政のやり方は実害も風評も一緒にたにして、実害に蓋をしよう。先日、小学3年生の娘の話を聞いて唖然としたことがある。校外学習で放射線量が毎時10マイクロシーベルトくらいある山に行き、「昔から有名な石垣の間に刺さっている侍の刀を触ってきて、すごく錆びていて冷たかった」と言うんです。学校からの事前連絡もなかった。錆はすごく放射能が付くので、それを聞いて愕然としました。

地域のお母さんたちと始めた青空市場は5年目に入ったけれど、お寺の改修工事のため、一旦店じまいすることになった。新潟の仲間のお坊さんたちが米や野菜を送ってください

しようがない。今では3年生になった長女から「ママ、なんで地震がきたら津波がくるかもしれない海の近くに原発を作ったの？」と質問されて、どう説明しようかと思っていたら、「私だったら、絶対津波が来ない山のとっぺんに建てるよ」と。ああそうきたかと思つて「そっかあ。でも原発じゃなくても電気は作れるんだよ」と言ったら「うっそー！じゃあなんで原発作つたんだよー！」と。3年生でそう思わざるを得ない生活をしてきて、勝手に学んでいくんですね。

長女は外で遊んだ経験があるから事故後は我慢の生活で、公園の前を通ると遊びたいなって言うんです。下の子は1歳で被災したから我慢をするのが当たり前。

我が家では台所が一番線量が低いので、食べるのも寝るのも子どもたちは台所。素敵な家がたくさん紹介されるテレビ番組を見ていた長女が「ここのいいなあ、ママ！ 私が買った！」と言うのに、1回だけ「買う」と言わなかったのは海岸の家だった。「海見えるから、津波がくるからいらない」と。長女は津波の経験はしなかったけど、テレビ映像で怖さが頭の中で膨らんでしまつて、震災後一人でトイレの水を流せなくなった。小学校に入って膀胱炎になつてしまい、今は仲良しの友だちについて行ってもらっている。



もつと可哀そうだったのは、去年、円形脱毛症ができたこと。成長していくにつれて、現実を理解したうえで我慢するストレスとの闘いが大きくなつてきたんだと思う。髪の毛を編んであげた時に一つ目のハゲを見つけた時、私もショックで彼女に伝えることはできなかった。まだ8歳ですよ。誤魔化せるうちは黙っていただけで、いよいよ増えてきて鏡を見たら気づくなど思つて打ち明けたら「本当？」なんてびっくりした。

でも「気にしたら増えるから」となるべく楽しく会話している。不思議なことに、気持ちが落ち着いてくれれば髪の毛が生えてくるんですね。子どもは2人とも娘なので、将来の結婚を思うと差別されなかが一番心配。震災1年後に、県外で福島ナンバーのため駐車場に止めさせてもらえないという経験を自分もした。こんなあからさまな経験をすると、娘たちの将来がすごく心配だけれど、元気に育つて、家庭を作つて、出産して、という生活を親としてちゃんと見届けたい。娘たちも頑張っているから私も負けない。そう考えると、

地元の人でにぎわう青空市場。



り、そこから支援者の輪が広がり、5年間で550カ所から野菜や支植物資、激励の手紙が届けられた。当時は何を食べて良いのかわからなかった。支援助物資や野菜は本場にありがたかった。学校で放射能の話をするとな変な目で見られるんじゃないかと話しづらかったけれど、毎

原発の怖さを4歳で知った娘に申し訳ない

渡邊美幸／わたなべ・みゆき
青空市場委員会ハハレンジャー

これまでがむしろに突っ走ってきた分、これからはガス欠にならず、時々足踏みしながら、全速力はや

本来の自分を取り戻すためにも、東電と決着をつけたい

門間貞子／もんま・さだこ
こどものいえそらまめ園長

19 年前にシュタイナー教育を始めたとい福島市渡利に保育園を立ち上げ、徐々に施設を増築し、ホールを新築した数カ月後に大地震が起きた。渡利は県庁を挟んで阿武隈川の反対側にあり、住宅地が広がりに自然にも恵まれた地域だった。そこが突然、放射能汚染のホットスポットとなつてしまった。

震災後、すごい速さで福島を離れた家庭もあり、自転車で園児の家を



月2回開かれる市場では、同じ意識をもつ人たちと出会う場所になり、お母さんたちは、「ハハレンジャー」なんて名前をつけて、子どもたちの将来のために元気に活動した。市場の閉鎖については何度も話し合い、いつまでも送られてくるものに頼って生活するのではなく、自分たちでできる活動に変えていこうという結論になった。

4 年前、次女が1歳児検診を受けていた時に大きな揺れに遭つて、オムツ一丁の娘と駐車場に逃げた。そこから被災と原発事故後の生活が始まった。それまでは福島出身なのに原発を意識して生活することはなかった。原発事故がどれだけ危険なものかを、長女が4歳で気づかされたと思うと申し訳なくて

めて、競歩ぐらいで娘たちの将来を楽しみに生きていこうと思つていま

廻つたが、ほとんどが空き家になつていた。当初23人の子どもたちは9人に減つてしまった。除染をしまくっていたけれど、雨が降ると放射線量がまた上がる。放射能と真つ向対決しても本来の保育ができない、もうこの場所を離れなければと決断し、17キロ離れた低線量地域に泣く泣く保育園を移転した。

最初の1年は残った者どうしで力を合わせて、子どもたちが安心して生活できる場所になろうという団結があったが、お母さんたちも疲れて足並みが乱れてきて、6家族が移転と同時に退園を決め、ここに来た園児は3人だけ。

残ってくれていたお母さんたちに移転先に登園するように進めたが、毎時0.23マイクロシーベルト以下(年間1ミリシーベルト以下)だからと伝えても、「遠い場所に通うことになる」と交通事故のリスクの方が高い。放射能は直ちに結果は出ない。何でもないという可能性もある。交通事故に遭つたら一瞬で終わり。移転する

ならうちは行きません」と言われた。仕事もあるためわざと子どもを連れてくる人もいないし、交通事故のリスクを考えたなら街中のビルの保育園が一番安全ということになる。

そして、子どもが集まらないという課題だけが残った。天地を覆すほどの出来事が起きたのに、人びとの認識はあんまり変わっていない。早い・安い・簡単にという世の中の流れは、何も変わっていない感じがする。

そうこうしているうちに不眠が続く、夜も昼も負けるもんかと歯を食いしばっていたせいか歯に異常な負担がかかってしまい、自分の身体がおかしくなってしまう。

東京電力の補償制度で、減った保育費収入と水道料など固定費と変動費の割合で出す貢献利益率を計算し、実質損失額の71%が翌年補償された。それで一年間は運営できた。でも、次に申告に行ったら24%しか補償さ

れなかった。なんとか切り盛りしたが運営はとも無理。さらに2016年には補償は打ち切りになるという発表があった。そうなると思えない。ざるを得ない。

好きで移転したわけではない。原因は東電の原発事故なのだから、補償額を71%に戻してもらいたい。引越費用も東電に支払ってもらいたい。そして精神的苦痛。この3点を弁護士とADRで東電を訴える準備を進めている。これで東電と決着をつけて本来の自分に戻り、私らしい保育ができる場所を探し、人生の再スタートを切るしかないと思っている。

〔注〕オーストリア生まれのルドルフ・シュタイナーが1919年にドイツで始めた教育実践。知性だけでなく子どもの心や体、精神性をも含めた全人教育をめざす。
〔注〕訴訟手続きをとり、中立的な専門家を通過して解決する裁判外紛争解決手続き。

震災があったから生まれたつながり

遠藤美保子／えんどう・みほ
原野聖愛保育園園長

この4年間はあつという間だった。震災直後は、やらなきゃいけないことがいっぱいあつても、何からやればいいかわからないのか全然見えない。閉塞感に押し潰されそうだった。でも皆さんが、南相馬のことを思っているよ、と祈りと支援をくださったことで解放された。自分た



ちだけで頑張るといふのは本当につらい。理解してくださる方がいるということは本当に大きな励みだった。町は様々な点で震災前とは全く違う。一番の問題は若い働き手がいなこと。福祉の現場は大変だし、看護師も不足し、医療が全く整っていない。震災前の人口は7万人強だったが、今は5万人以下で、そのうちの1万人近くは外から来た除染や原発作業員関係者。今こそ南相馬は一部を除いて線量的にはずいぶん低くなってきたが、保育士養成校に南相馬には紹介できないと言われた時もあった。

24人は9人になってしまった。電話で全家庭に安否調査したら、一時避難はしたが精神的にまいって戻ってきた家族が20家族あったので、9人で家庭訪問した。すると円形脱毛になった子、指しゃぶりがひどい子、歩いていのに歩かなくなった子、嘔吐と過食を繰り返していた子がいた。今は89人まで戻ってきたが、町全体では、就学前の子どもは40%しか戻ってきていない。何よりも元気でいてくれる子どもたちがいるから頑張れる。

自然ほど素晴らしいものはないという考えで保育をやってきた。でも奪われたものが自然だった。松ぼっくりやどんぐりを横浜や和歌山から送ってもらって遊んでいる状態。奪われたものはあまりにも大きかったけれど、九州をはじめ各地からの野菜やフィリピンのバナナを含めて、みなさんに支えられ、つながれたという大きな恵みにも出会えた。本来なら震災がなかったとしてもつながらなければいけないと思うけれど、世の中はあまりにも便利で、それに慣れると自分たちだけで生活が成り立ってしまうし、自分たちだけで完結してしまう。だから今は、震災があったからこのようなつながりが生まれたことを子どもたちにも伝えて、今度は他の人に何かあったら自分たちができることをしようねと話しています。

『クロンビ、風が吹く』を見て —江汀村、そして辺野古

冠村京子／かんむら・きょうこ
鐘聲の会会員

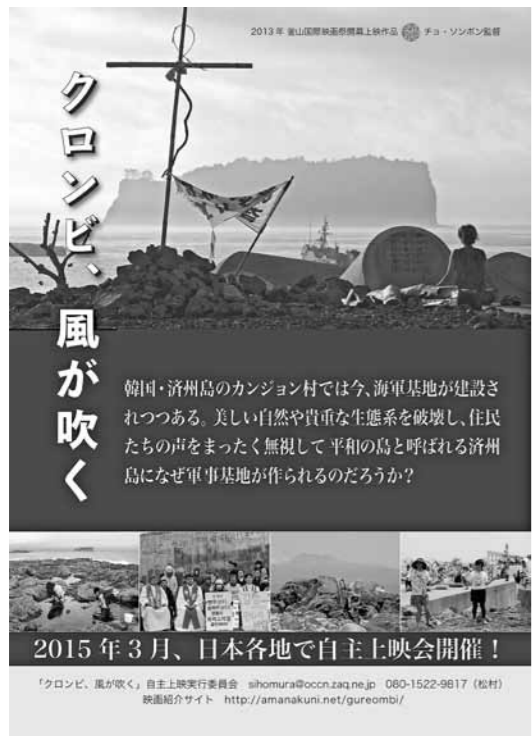
韓 国 済州島の南側、中文と西帰浦の中間に、江汀村がある。江汀村は村民1970人の小さな漁村だが、韓国政府は突然、海軍基地予定地にこの村を指定した。2007年4月のことである。海軍に説得された何人かの住民の主導で、村会臨時総会が開かれ、村民のうち87人だけが参加し、拍手のみで海軍基地誘致を決議した。大半の村民は、寝耳に水であり、このような臨時総会が適法に行われていなかったと強く反発した。8月に海軍基地建設の是非を問う再投票を行い、725人が参加して680人(9%)が反対票を投じた。

しかし韓国政府は、多くの住民の反対の意思を無視し、手続的に正当化できない最初の投票の結果のみを強調して、海軍基地建設が住民の同意を得た事業だと主張し、基地工事を強行した。それから村民たちの長い闘いが始まった。「クロンビ」とは江汀村の海岸にある、長さ1.2キロ、幅150メ

ートルに達する大きな一枚岩の呼び名である。クロンビからは20もの泉が湧き出し、絶滅危惧種を含む様々な生き物が生息し、天然記念物保護地域やユネスコの生物保護区に指定されており、そして何よりも村人たちが聖地として大切に守り、慈しんできた場所なのである。ところが基地計画が出されるとこれらの指定は簡単に解除されてしまった。このクロンビを守り、今まで暮

らしてきたままの美しい海と生活を壊さないでほしい、という至極まっとうな主張を通すための闘いである。しかし、この小さな村に13万人余の鎮圧警察を投入し、クロンビに通じる道は高さ3メートルの鉄製フェンスで封鎖され、誰も立ち入れなくされてしまった。岩は粉碎され、コンクリートで固められてしまった。基地はすでに6〜7割が完成されているという。それでも、村民は闘いつづけている。

この映画を見るまで、韓国でもこのような闘争が続けられていることをまったく知らなかった。監督はチョン・ソンボン。1997年には済州島四三事件のドキュメンタリー『レッド・ハント』という作品も公開している。



2015年3月に日本各地で自主上映会が開かれた。

この映画は、村民の熾烈な反対闘争、警察と激しくぶつかり合う姿を捉えるが、同時にクロンビを含めて豊かで穏やかな自然の風景を映し出す。いやでも人間の小ささと愚かさを感じてしまった。2013年の釜山国際映画祭で上映され、もうすぐ韓国で正式に封切上映されるそうである。機会があればぜひ大勢の人に見てほしい。

03

03 口口サエの歌が聴こえる 05

Ego Lemosの世界

野川未央 / のがわ・みお
APLA事務局

BE'E

水道の蛇口をひねればいつでもきれいな水が出てくる。店頭や自動販売機には国内外の様々な銘柄のミネラルウォーターが並ぶ。そんな国に住んでいると想像することすら難しいかもしれないが、2015年現在、世界では7億6800万人もの人たちが安全な飲料水にアクセスできない状況で日々を生きている。

エルメラのコーヒー産地でも、水(BE'E)は人びとの大きな関心事。安心して飲むことのできる湧水を集落に引き込んでいるものの、季節によって水量は大きく変化する。共有の水場からポリタンクで水を運ぶのは女性や子どもたちの仕事で、両手と頭の一つずつ、危なげもなく運ぶ姿は見慣れた光景だ。

雨が降り、大地にしみ込み、山に蓄えられた恵みの水。今のところは年中枯れることなく湧いているが、気候変動や森林の減少の影響は深刻だ。子や孫のために、森を育て、水源を守っていく取組みが始まっている。

Be'e sulin haleu ba rai hotu
Hodi fo moris ba buat barak
Ema barak la kuidadu be'e
Fatin barak terus laiha be'e

水は流れ、大地を潤し
すべての存在に命を与える
多くの人間はそのことを忘れ去り
多くの場所で水が失われつつある

Be'e mak fo moris Ita hotu
Laiha be'e laiha moris

水こそがわたしたちを生かしているのに
水がなければ、命もないのに (訳:野川未央)



毎日の水浴びも湧水で。

01

01 kakao kita

カカオ民衆交易奮闘記

11

津留歴史 / つる・あきこ
オルター・トレード・インドネシア社現地駐在員



森から今日のおかずを調達。

カカオ豆の買付で村々を回る日々を送っているが、途中食堂などがないので村人のお宅でこちそうになることがある。海辺の村である日の食卓に並んだのは、「サコ」(和名:オキヤヨリ)という胴体の細長い海魚、「クラティ」というイモ類、サゴヤシでん粉を熱湯で溶いた「バベダ」、そしてココナツの汁と一緒に煮た野菜。すべてが海と森でとれた産物。現金で買ったものは調味料の塩だけである。食べるものは自力で調達できる。これがパプアの先住民の暮らしの基本である。

カカオ豆の買付を終えた日没前、軽トラで走りながら必ず目にする村落部の光景は、大ナタを手に重たそうな袋を頭にひっかけて、森での採取から家路を辿る女性や子どもたちの姿である。私たちの軽トラに森から帰る村人を途中まで乗せてあげることもよくある。「今日の夜ごはん?」と聞くと、「そうよ! イモとバナナ!」おかずの調達にちょっと森まで行ってきましたという人。いながら運ぶ遅い女性たちもいる。彼女たちに話を聞くと、月に2回程度、仲間数人で車をチャーターして町の大きないちばに野菜や果物を売りに行っているとのこと。昔と違って今は現金がますます必要になっている。女性たちは口ぐちに「子どもの学校にお金がかかるのよ。入学金に制服代、教科書代。大変だわ!」再び海辺の村に買付に行った時のこと。おじさんがバケツに魚を3〜4尾入れて浜から上がってきた。「漁に出ていたんですか?」と聞く。「いや、家で食べるためにちょっとと獲ってきただけさ」と何気ない返答。村の人たちは自家消費用の魚を獲るために小舟でひよいと釣りに行くのが日常だそう。時々頑張った岩場のロブスターを獲り、いちばで売る。大量に獲って現金を稼ごうという意欲はあまりないらしい。そうか、これがこの地域の自然と人びとの暮らしがバランスを保っている理由かもしれないと納得した。

自然にやさしい人びとの暮らし

04

04 美味しいマンガ 05

『ばらかもん』

ヨシノサツキ [著]、
スクウェア・エニックス [発刊]

安藤丈将 / あんどう・たけまさ
武蔵大学教員



最近、「わけるとふえる」という言葉が気になってきます。これは、自分の住んでいる町にある障がい者の作業所の合言葉です。この作業所では、昼食時、突然の訪問者が来た時にも分け合って食卓を囲むということをしていて、そこから合言葉が生まれたそうです。でも、一歩外に出れば、富が少数者の手に独占され、貧富の格差が広がるばかりの社会。こうした現状では、「わけるとふえる」のリアリティを疑う方もいるかもしれません。今回紹介するのは、ヨシノサツキ『ばらかもん』(スクウェア・エニックス)ですが、そこには「わけるとふえる」の世界を見て取れます。

「わけるとふえる」

このマンガの主人公は、二〇代前半、都会育ちの書道家、半田清舟。自分の作品を酷評した書道館の館長を殴り、長崎県の五島列島に移住を強いられた。半田先生の目を通して見える田舎暮らしのドタバタが物語の軸です。ある日、彼は、小型船の側面に船名を書く仕事をして、その報酬として山盛りのワカメをもらいます。それを分けてあげようとして、普段からお世話になっている近所さんを回りました。ところが近所さんは、次から次へと半田先生におすそ分けを返します。ピーマン、ナシ、漬け物……。最後には彼の両手がもらい物でいっぱいになりました。半田先生は、「まるでわらわらべ長者になった気分だな」とつぶやきます。人のために自分のできることをして、それで人からもらった物を分けて、人がまた別の物を分けてくれ、結果として豊かになる。実は「わけるとふえる」は、身近なところにあったのです。

人と人が激しく競い合う社会では、「わける」というのはまれなこと。人に「わける」と自分の取り分が「へる」ことを恐れて、「わける」のをためらうからです。しかし競争社会の行き着いた先で、それが本当に私たちに幸せにするのかという疑問を持つ人は、少なくないのではないのでしょうか。自分の作品の、そして自分の生き方の方向性に迷っていた半田先生が島でいきいきと暮らしている姿は、豊かに暮らすコツが実は「わける」ことにあると教えてくれているように。

02

02 マニラ・ジープニー通勤 5

小川二美子 / おがわ・ふみこ
マニラ在住、会社員

また燃料補給ですか?

始発のジープニーは、満席にならないと出発しません。今日は日曜日なので乗客も少なく、出発するまで5分以上かかりました。やっと出発と思ったら、100メートルほど先のガソリンスタンドへ。

「ちょっとー、ガソリン(ディーゼル)入れるんだったら、お客のいないときにしてよ」と思いましたが、「あっ、でも、今集めた運賃で給油するのかな」と考え直しました。あまりの自転車操業!(わが社よりスコイ)

しかも、「ワントウエンティー ナ ラン(120ペソだけ)」と聞きました。パサイ行きのジープニーですが、間に合うのでしょうか?

このごろガソリン代は下がっています。数カ月前に初乗り運賃8ペソが8.5ペソに値上がりしましたが、原油価格が下がったことから、すぐに7.5ペソになりました。燃料代は下がっても、すぐに運賃値下げになるから、運転手さんは儲からないですね。それにものすごい物価の高騰。運転手さんのご苦労わかります。ほとんどの運転手は、1日800ペソでジープニーを持ち主から借りています。燃料

代は自分持ち。1日中、排気ガスの道路を往復して、売上は、燃料代とレンタル料と、自分の食費を引いたら、300ペソ~500ペソです。それで家族を養っているわけですから大変です。

友人のエドさんは、昔ジープニー運転手だったそうですが、恋人のお父さんに「ジープニー運転手ごときが」とさげすまれ、結婚できなかったことから転職し、今は企業の運転手をしています。階級社会のフィリピンでは、ジープニー運転手は下層とされているのです。

ガソリンメーターなどないジープニーでは、運転手席の脇の燃料注入口に棒を突っ込んで、棒についた水位の跡で燃料を量ります。「もう限界だ」と思ったら、手持ちの売り上げだけでガソリンスタンドに急行するのです。乗客は「チッ」とか、舌打ちすることもなく、ガマンして乗っています。ジープニー運転手の苦労、理解してるんですね。



APLA 食堂

Kitchen APLA

09

今日の食材 **バラゴンバナナ**

レポーター **大久保ふみ** / おおくほ・ふみ
APLA事務局
廣瀬康代 / ひろせ・やすよ
APLA理事



バナナたっぷりアイスクリーム

【材料 (2人分)】

- バナナアイス (110mlのもの)1個
 - 完熟したバラゴンバナナ1本
- ※それぞれの分量はあくまで目安なので、お好みで量を調節してください。

【作り方】

1. アイスを少し溶かすために冷凍庫から出しておく。その間にバナナは皮を剥きフォークで潰す。
2. バナナとアイスクリームを混ぜ合わせ、冷凍庫で2時間ほど凍らせる。冷凍後20〜30分した辺りで一旦取り出して混ぜると滑らかな仕上がりになる。

【スタッフのおすすめ】

- 2.の時に、アイスと相性抜群なカカオニブを加えるとサクサクの食感とほろ苦いカカオの味がプラスされてGOOD!

カカオニブ入り



APLA食堂では、ATJ/APLAで扱っている食材を利用したレシピをご紹介します。手の込んだ料理も素敵ですが、もっと手軽に使っていただけるように、「誰でも簡単に作れる」レシピをお届けします。

バナナの追熟が進みやすいこの時期に、簡単活用法はいかがですか?



こんなに黒くなってしまったバナナでも大丈夫。

バナナホットパイ

【材料 (4本分)】

- バランゴンバナナ2〜3本
- 春巻きの皮4枚
- オリーブオイル適量
- 小麦粉少々
- 水少々

【作り方】

1. バナナは厚さ1〜2cmの斜めの輪切りにする。
2. 広げた春巻きの皮にバナナを並べ、春巻きを巻く要領で巻いていく。巻き終わりに水で溶いた小麦粉をのりにして止める。
3. フライパンにオリーブオイルを1〜2cmの高さに入れて温める。春巻きの巻き終わり部分が下になるようにフライパンに入れ、全体にオリーブオイルが回るようにしながらきつね色になるまで揚げる。

【スタッフのおすすめ】

春巻きを巻く際に、細かく刻んだカカオマスとマスコバド糖を適量ふりかけて一緒に巻いて揚げるとカカオマスが溶けてチョコバナナ味に。チョコレートを使っているわけではないので、カカオ独特のヒターな風味が楽しめます。



自慢する人

中村美紀 / なかむら・みき
集い繋がる暮らしのお店「ヒナタヤ」店主

「お母さんはこの卵焼きのために生きてきたの?」
とは高1次女の言葉。

この卵焼きのために生きてきたわけではないけれど、次女のお弁当に毎朝最高の卵焼きを焼くつもりで一つの卵を薄く丁寧に巻いて仕上げる。

この美しく美味しい卵を毎週「ヒナタヤ」に届けてくださるのは、西脇菊子さんだ。

私は「美味しいもの好き、基本ベジタリアン」なのだけれど、西脇さんの卵は本当に美味しい。現在は大学生になって家を離れた長女が家にいた時は、一つの卵焼きを長女のお弁当と、家族でお話し(少ないものを大事に)という意味の方に分けて頂いていた。

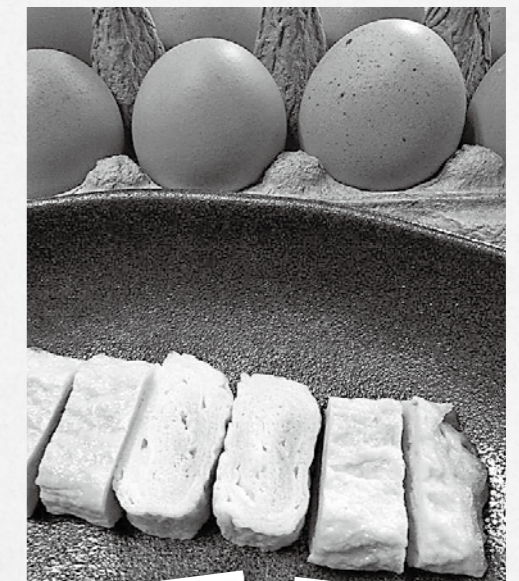
私が「ヒナタヤ」を始める前に働いていた婚家の「いたや酒店」で「パンの日」として天然酵母のパン屋さんのパンを置いていたが、6年ほど前、そのパン屋さんから「西脇さんの卵のステーションになってくれない?」と言われたのが、西脇さんのネラの卵との出会だった。

今回、原稿を依頼されて初めて

わたしの友産友消じまん 05

ネラの卵の巻

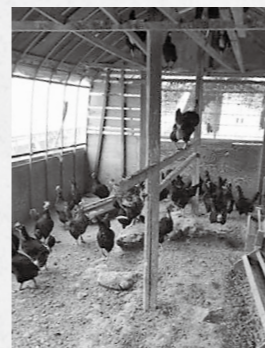
毎朝最高の卵焼きを。



にくい大豆はその場で煮る。お腹を空かせて待っている家族にお母さんがご飯を作るのと同じだ。

7坪ほどの鶏舎には、50〜70羽の鶏が自由に動きまわり暮らしている。鶏も運動をしないと高脂血症になるという。驚いたことに全く臭くなく土がさらさらしている。

鶏の腸内環境の現れである。鶏舎の中で発酵した菌体になっている。



初めて訪れた鶏舎。

「いろんな観点から見ると彼らの生活はおもしろい」と語る菊子さんは、ボスに目を付けられていて、鶏舎に入っていくと攻撃をしかけられるそう。

また、獣害対策として、克是さんが夜中に小屋を見回っていたところクマに襲われたこともあるという。地球からのギフトとしての卵を頂けることに感謝して、今日も卵焼きを焼く。

ので良い有機肥料もできる(臭い)のは鶏が消化不良をおこしているから。

雌40〜50羽に雄を2〜3羽を混ぜることによって群れとしての統率が取れる。雄がそれ以上多いと雄同士の喧嘩になる。

※現在、西脇さんの卵も野菜も分けられる量がないため、問い合わせなどはお断りしております。

ヒナタヤ
長野県伊那市日影171 《電話・FAX》0268-76-3178 《Website》http://www.hinataya21.com/

西脇克是さん、菊子さん。

編集後記

今号で特集した福島の人びとへのインタビューは、3.11東日本大震災によって起きた福島原発事故からちょうど4年を迎えた4月におこなった。これまでの時間の流れを、長すぎると答えた人、まだ自分のなかで整理がつかないくらい短かったと振り返る人、様々な思いを聞いた。子どもたちが受けた想像を絶するようなトラウマにあらためて原発事故の恐ろしさを痛感した。それでもしっかり前を向いて、人びととのつながりを求め、新しい人生を歩んで行こうとしている皆さんに心から感動した訪問だった。(大橋)

マーティン・ルーサー・キングは言いました。「最大の悲劇は、悪人の圧制や残酷さではなく、善人の沈黙である」と。安保法案が衆議院で強行採決されるという愚行を許してしまった戦後70年目の夏。沈黙を突き破り、ありとあらゆる形での意思表示を。(野川)

ハリーナ HALINA

2015年8月号 vol.02-no.29
2015年8月1日発行

【編集長】
大橋成子

【編集者】
野川未央
吉澤真満子

【表紙写真】
長倉徳生

【デザイン・制作】
十年舎

【編集・発行】
特定非営利活動法人 APLA
(APLA/あぷら: Alternative Peoples' Linkage in Asia)
〒169-0072
東京都新宿区大久保2-4-15
サンライズ新宿3F
tel. 03-5273-8160
fax. 03-5273-8667
e-mail info@apla.jp
URL http://www.apla.jp

【印刷】
株式会社セイズ

【事務局だより】

事務局の動き(2015年5月～7月)		
5月 2日	恵比寿ガーデンプレイスフェスタ「Life is Delicious 大人のおいしい休日」に出店しました。	
5月 4日	「今日だけ、こどもパーク!」に「P to P Café」として出店しました。	
5月 9日	フェアトレード・マルシェに出店しました。	
5月 23日	第8回総会を開催しました。	
5月 24日	東京朝市・アースティマーケットに「P to P Café」として出店しました。	
5月 24日	WE21相模原による「WE講座」で野川が東ティモールについて講演しました。	
6月 18日	東洋大学で野川が講義しました。	
6月 20日	ATJと共催の公開セミナー「バランゴンバナナの民衆交易はどこまで生産者の自立に寄与できるのか～フィリピン産地調査報告～」を開催しました。	
6月 21日	埼玉県秩父市で開かれた映画「カンタ!ティモール」上映会&トークセッションに野川が参加しました。	
6月 26日	ハリスシステム埼玉・ふじみ野地区会にてコーヒー講習会を行いました。	
6月 28日	東京朝市・アースティマーケットに「P to P Café」として出店しました。	
6月 28日～ 7月 9日	フィリピン・北部ルソンおよびネグロスへ秋山が出張しました。また、カネシゲファーム・ルーラルキャンパス(KF-RC)の理事会が開催され、秋山が出席、寺田、評議員の秋山澄兄さんが陪席しました。	
6月 29日、 30日	グリーンコープ共同体にて「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップを開催しました。	
7月 2日	NGO非戦ネット設立イベント「NGOは安保法制とどう向き合うか?」に野川が参加しました。	
7月 7日	ハリスシステム埼玉・熊谷地区会にてコーヒー講習会を行いました。	
7月 16日	福島県再生可能エネルギー合同ビルの開所式および記念講演会に秋山が参加しました。	
7月 18日、 19日	東京朝市・アースティマーケットに、「P to P Café」として出店しました。	
7月 25日	「ガザ攻撃から1年・7.25NGO共同イベント実行委員会」に参加し、講演会+キャンドル・ウォーク「ガザ紛争から1年～国連はなぜ解決できないのか～」を開催しました。	
7月 28日	東洋大学にて「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップを開催しました。	

事務局からお知らせ

2015年7月2日、「NGO非戦ネット」が設立されました。

わたしたちは、現在国会で審議されている安全保障関連法案と、この法案を中心とした日本を戦争ができる国にしようとする動きに反対します。NGO非戦ネットは、現場で国際協力活動・交流活動を行うNGOの有志が集う緩やかなネットワークです。2002年にも同じ名前の「NGO非戦ネット」が立ち上がり、現場で活動するNGOの立場からイラク戦争と、それに伴う日本政府の有事法制に反対の声をあげました。その後一旦ネットワークを整理・解散しましたが、現在の国際情勢と現場の状況を顧みない戦争法制を黙って見過ごすことができないと考え、最初の「NGO非戦ネット」の主旨を受け継ぎ、新たにNGOによる非戦のネットワークを作りました。今後は、現場で活動する人間の立場から、声を上げ、イベントや情報発信を行っていきます。詳細は→ <http://ngo-nowar.net/> をご覧ください。

以下の呼びかけに賛同・参加しました。

- 3カ国市民社会共同声明:「プロサバナ事業のマスタープランに関する公聴会」に関する無効化呼びかけ
- 日越両政府にニントゥアン第二原発計画の中止を求め、同計画による住民立ち退きに抗議する国際声明
- 「TPP交渉及び審議・検討における透明性」に関する対政府要請
- 国際共同アピール:「インドの使用済み核燃料再処理を可能とする日印原子力協定を締結するな」

「福島の子どもたちに届けよう バナナ募金」へご協力を!

20施設、約1400人の子どもたちへバナナの発送を継続してきていますが、募金額が減少してきております。皆様のご支援・ご協力、よろしくお願いいたします。



KF-RCの研修生とスタッフたちから「Madamo Gid nga Salamat!!! (どうもありがとうございます!!!)」

た研修生が、地元に戻ったときに農民として自立していくための一歩を応援する仕組みをスタートさせていきます。クラウドファンディング終了後、第5期生とKF-RCスタッフとのミーティングを開きました。そこで改めてクラウドファンディングのことを説明し、本当に多くの方々に支えられて活動ができていくことを伝え、叱咤激励しました。

研修生、スタッフ全員が感謝しているのはもちろんのこと、「もっと自分の養豚を展覧させていきたい」、「これからどんな挑戦を続けていき、成長していきます」、「この養豚の仕組みのおかげで自立していけるだけでなく、家族を助けることができている」など、話してくれました。

スタッフのジョネルくんからは「私たちは、皆さまのご支援や応援に大きく支えられています。特に研修生の卒業後の養豚のプロジェクトでは、彼らが地主や権力者、雇い主なしで自分たちの農業を始め

また、私自身も沢山の方からあたたかな応援メッセージをもらい、ご支援・ご協力してもらったことへのうれしさと同時に、プロジェクトをしっかりと進めていかななくてはならないという大きな責任をひしひしと感じております。事務局スタッフ一同この気持ちを共有しておりますので、KF-RCスタッフ、卒業生、現地の人びとと共に、気を引き締めて、これからもこのプロジェクトを成功させるために全力で取り組んでいきたいと思っております。

一方で、この仕組みをスタートさせれば、みんな簡単に

自立した農民になれるという綺麗な話だけではありません。豚の突然の病死、なかなか売れない時季、乾季の水不足など、様々な問題があります。KF-RCでは、地域に戻った卒業生はこまめに連絡を取り合い、問題を共有したり、セミナーを開いたりして、一緒に問題を乗り越えていきます。もちろん卒業生自身の意識がとても重要です。モチベーションを高く維持しつづけるべく、定期的にKF-RCに集まってミーティングを開く予定です。

クラウドファンディングの募集期間は40日間でしたが、実は約1年前からこの挑戦の計画をしていました。APLAとして初めての試みで、反省点も含めて多くの学びや経験となりました。今回得たこれらの成果を今後活かしていけるように、事務局でも総括をしていきます。これからもネグロスの活動、APLAの活動を厳しくもあたたかな目で見守っていただければ幸いです。(APLA事務局:寺田俊)

From Philippines【フィリピンより】

皆さまの応援のおかげで目標達成しました!

ネグロスより こんにちは!このたび挑戦した「フィリピンの若者たちが農業でひとり立ちするのを応援したい」と題したクラウドファン

協力をいただきましたことに、心より感謝申し上げます。目標金額の100万円を大幅に上回る123万2500円の支援金が集まり、目標達成することができました!本当にありがとうございます。もちろん、これで終わりではなく、これから大切です。皆さまからの支援金で「研修生サポート基金」を構築し、カネシゲファーム・ルーラルキャンパス(KF-RC)を卒業し

クラウドファンディング終了後、第5期生とKF-RCスタッフとのミーティングを開きました。そこで改めてクラウドファンディングのことを説明し、本当に多くの方々に支えられて活動ができていくことを伝え、叱咤激励しました。

また、私自身も沢山の方からあたたかな応援メッセージをもらい、ご支援・ご協力してもらったことへのうれしさと同時に、プロジェクトをしっかりと進めていかななくてはならないという大きな責任をひしひしと感じております。事務局スタッフ一同この気持ちを共有しておりますので、KF-RCスタッフ、卒業生、現地の人びとと共に、気を引き締めて、これからもこのプロジェクトを成功させるために全力で取り組んでいきたいと思っております。

一方で、この仕組みをスタートさせれば、みんな簡単に



周囲の方に声をかけて代表でご支援くださった方、APLAが代理となった方が数多くいるため、実際には200人以上の方のご支援によって目標達成できました!